

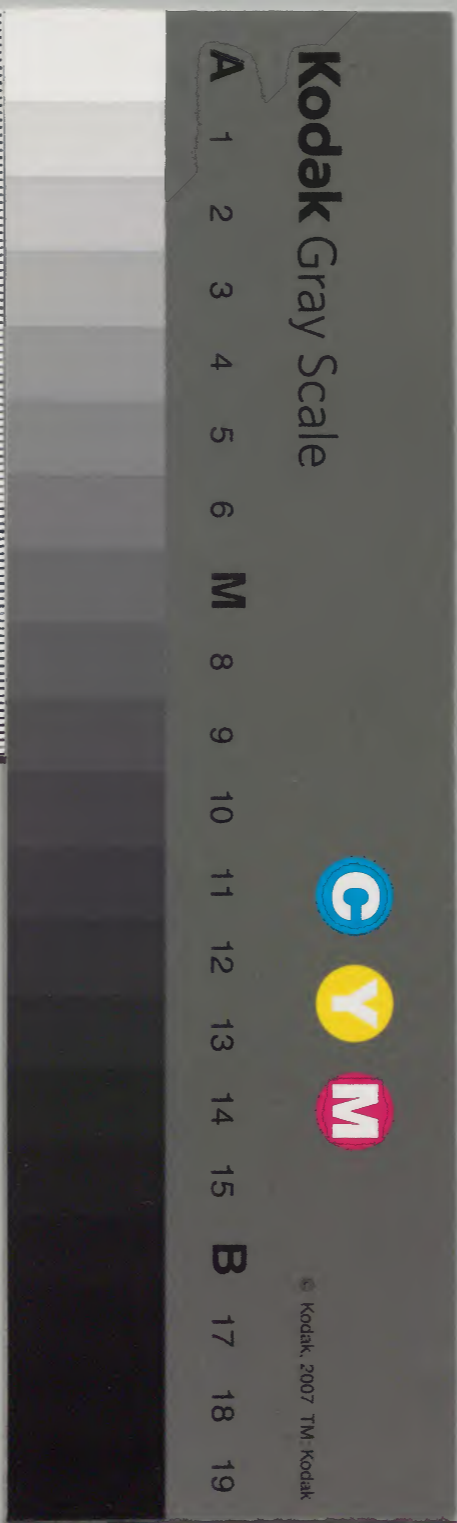
海外異聞

七

| | | | |
|-------|---|-----------------------|-------------|
| 太政官文庫 | | | |
| 三 | 三 | 七 八 九 六 二 | 用 書 門 |
| 冊 | 架 | 函 | 號 |

| | | | |
|-------------|--------|-----------------------|-------------|
| 內閣文庫 | | | |
| 八 五 函 | 三 冊 | 七 八 六 二 號 | 和 書 類 |
| 架 | 冊 | 號 | 類 |

| | |
|------|----------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 7862 |
| 冊數 | 33 (8) |
| 函號 | 185 133 |



欽
州
文
庫
印

海外異聞卷之七

目錄

一 唐大浩

一 振興

欽
州
文
庫
印

松
之
象
系

欽
州
文
庫
印

欽
州
文
庫
印

海外器圖卷之七

唐太清白王と申す西の方其分仕り如

左の通に其座也

唐々清々松の試申す方南の少あり同前白と

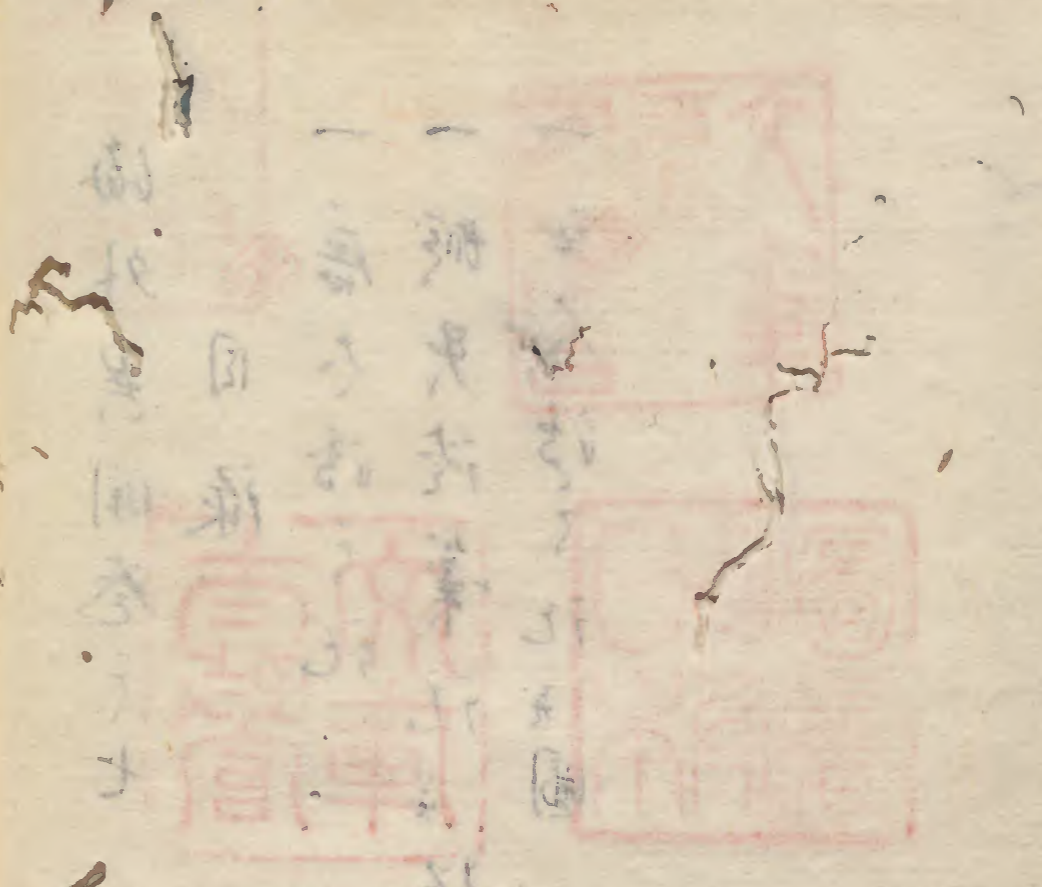
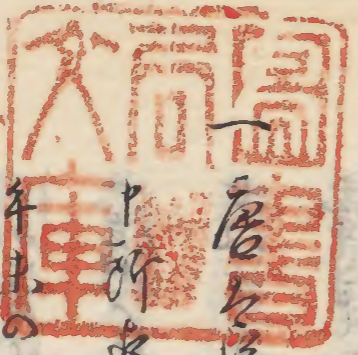
中折是れ松治式自丘拾葉仕りく風助存とて風

年の風近視風仕り同前の散史海濱を象指仕地

方の東の山也清西の海をふく洞治るを綴換

唐々二下余深々武拾葉余洞をふく採ふく順内式

拾葉の洞も漢をを拾仕り山の平山を樹也



よく漢道下山橋迄五町程之間平野よく石白く
ふく星夫人の夜夜を賦の如く地口拾九
夜毎に相見合中其の意を言ふより
家言より増利地くも住んく雲の積りも家言を
一倍よみ其の中いふはさきさき言ふ
七八下中沖に水海に如く夜帳與人の馬車に家言
幸も住居は又去る秋未止の住者とし水少なり
ふくむる住居は石白く中知帳與人抱方交
易の如く昔の如く同の家言式如く人別其人

日買定か拾式人産業去く男帳頭練漢心帳頭同
豫方長と男帳頭鶴約漢中帳頭昆布豫方秋
男如去秋味縫衣物豫方冬男帳頭水豹明換
類漢津也帳頭もるる何り一紙織成一交易
衣物其為用住類山の産物松帳頭用紙一尺漢中
用紙あつたの木具の月日妙記の木皮を製紙帳頭
の木皮を製紙帳頭用紙一尺漢中用紙あつた
合根の食肉住む思ふ白き菊食物徳皮帳交易保大
製紙類帳と葉用紙筒皮を製紙リキニカムイ刑麻と紙類と大
黄紙の類皮を製紙帳頭用紙一尺漢中用紙あつた

四角の半を半一候を色に氣色
海の點々録
易名を記す

糸 絹 絹 絹 絹
海 海 海 海 海
水 水 水 水 水

昆布 海苔
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

白 白 白 白 白
白 白 白 白 白

大入腹ウ又ニと申前記に於ては船夫一人を法を家居住
地方の東の山を西の山を海をふくむ山脈
泊るも坂を越丁斗の川を渡りて船渡場を山
の山山と樹ありて又此の川幅拾捌町川
を下りてたの家の敷地約拾貳人日男七人廿五
人産物産業を白と日種をたの山ウ又ニと申此の
艘六里程ありて川と申所を産物番
小船を流すの船夫一人を海邊の家居住地方東南に
之方山を西の山を海をたの川と申所を長拾

町幅貳拾伍町深りは舟河をの舟渡續ありて

川幅在田斗と申す
船夫計船渡律仕 ありて山をの山を樹あり

松形 深り山脈近ん道程七丁の川を野ふくむ

家敷を拾捌人日男七拾九人廿五拾貳人
也在の山を業をたの山を船夫船渡律仕也船夫日男
豫方其を男船夫船渡律仕也船夫日男豫方秋
の男也秋の豫方をの男船夫水船相損て船渡律
将用少汀の船渡細也船夫也る也何の一船渡織
と一交易産物番も用仕の産物山をの松形行

かつこの本を記す所の本名はついでに志百合並葉蒲食

のたつたの 浮末と名 〇 さるる 魚菜 さるる 鮭 鮭 十十カ

上刑馬と似てく麻一一倍大ク毛を引取ると長リ 保大 櫻魁瓶

手平海と味余味長ク山を以て名 食物 仕を大リ 海 藤

昆布海苔類胡指水豹江豚の類ふも在り右ツシナ

より凡道規を望座しツシナ上順ヲシテシ

所こも在り眼尖人海濱の家指仕地方山より山

て樹木原 松楓 海より山と依てツシナ 鮭 引湯

家殺出野人別拾以人門男七人女拾人産業

ツシナ上回極を在り右ヲシテシより凡道規

種より同族トフシと申すは在り眼尖人海濱の家指

仕地ニ方東む山を隔西山海山より水洞洞あり洞

意の依てツシナ 鮭 引湯

山と樹木原 松楓 所より野合より幅拾上六回

はれあり 長と野結 家殺七野人別拾以人門男十

甲人女武拾以人女也産業をツシナ上回極を在り又

いさし 及 殺と試み知凡少極を仕地出拾を依

小洞是れ果を白より落しをい白より拾り

此所より北に山あり其の諸より拾所の津と水海あり
 山由右トフビより凡道親を望む所より同順ヲコト
 中此と在る所海邊の家指仕地方山より年山を
 樹木招振所より海邊より又法中幅拾田斗を
 川下よりあり昔の勢社と海邊より年破邊より山に河内
 幾川湯より在る家致其野人別之拾五人日男拾五人
 拾五人産物産業由ツナ又同順より在る右ヲコト
 凡道親に望む所より同順アサシナ又トシテ在る所
 主人海邊の家指仕地方山より年山より樹木招振
文此右拾五人より山に一ツあり海邊より所より
 山に河内縣邊邊より在る家致其野人別之拾五人
 日男五人日武拾五人産物産業由ツナ又同順より在る所
 右アサシナ又凡道親に望む所より同順アサシナ又トシ
 山より在る所海邊より家指仕地方山より年
 山より樹木招振所より野合山より海邊より山
 川に河内縣あり海邊より年破邊より山に河内縣邊邊
 家致其野人別之拾五人日男九人日武拾五人産物
 産業由ツナ又同順より在る所右ヲコトより凡

道規一里斗より河原ヲトテリとナリ
 人海濱の家指仕地ニテ年山ニ樹木厚ク
 登谷山ノ海ニテ激流ノ深ク人松洞泊
 あり流急平坂ニテ餘溪陽ニテ家敷ニテ人
 別拾人日男九人女九人産物産業ヲツテ又日取
 小石ノ右ヲトテリトテ凡道規五里強ク
 比口ツトテ前ニテ年山ノ海濱ニ家指仕地方山
 年山ノ樹木厚ク松ノ溪陽ニテ山際迄ニ四丁ノ
 河原野ニテ小川流ルル海ニテ年取ニ
 小松洞泊ニテ餘溪陽ニテ家敷ニテ人別十
 人日男二人女九人産物産業ヲツテ又日取ニテ
 石比口ツトテ凡道規三里強ク河原キトウシテ
 又小川中流ニテ年山ノ海濱ニ家指仕地ニテ
 山ノ年山ノ樹木厚ク松ノ溪陽ニテ山川
 二ノ海ニテ年取ニテ小松洞泊ニテ餘溪陽ニテ
 家敷ニテ人別拾人日男九人女九人産物産業
 ヲツテ又日取ニテ年山ノ右キトウシテ又日取
 規記ニテ年山ノ右キトウシテ又日取ニテ年山ノ

海濱の家指仙の地方山々あり山あり溪邊あり樹
木あり松檜 石山あり海に接する山あり新
海と名づく溪邊あり山と名づく海濱あり
里野人別武拾五人の男七人の拾取人産物産業あり
ツナ子同極と名づく右にツナ子あり凡道親
を里と名づくツナ子あり山あり海濱あり
山あり指仙地方東山と名づく西の海邊あり諸子
平極山と名づく海濱あり海濱あり山あり
と平山あり海濱あり樹あり又一方南あり

此りとも里斗りのところ山あり
この名トウキタウシト唱ルル茶畑
ナニ道親と申も此海濱

山と名づく極同斗り山あり海濱あり七好
人別武拾取人の男七人の拾取人産物産業あり
ツナ子同極と名づく右にツナ子あり凡道親
拾取人海濱あり山あり海濱あり山あり
山あり海濱あり山あり海濱あり山あり
山あり海濱あり山あり海濱あり山あり
山あり海濱あり山あり海濱あり山あり
山あり海濱あり山あり海濱あり山あり

一 浦之浦より拾町系に浦之水海に故より由る致之間人
別は拾町系内男拾町系女或拾町系人産業より男頭
強漢津也此男頭は強漢津又山頭と稱する可也
山頭頭と交易仕る也此頭頭と交易仕る可也
交易物も急用仕る也此山頭と松根所取つこの
おむむすの木の根をさす葉をウツシ
保人概十ナカエリギンカイ海と強漢津強漢津
保人概十ナカエリギンカイ海と強漢津強漢津

布海若強漢津の強漢津と強漢津と
一 浦之浦より拾町系に浦之水海に故より由る致之間人
別は拾町系内男拾町系女或拾町系人産業より男頭
強漢津也此男頭は強漢津又山頭と稱する可也
山頭頭と交易仕る也此頭頭と交易仕る可也
交易物も急用仕る也此山頭と松根所取つこの
おむむすの木の根をさす葉をウツシ
保人概十ナカエリギンカイ海と強漢津強漢津

三拾人内男拾一人女拾一人産業産物も十ヨロ同極

一ノ海に流石タス二十日より凡道親武拾七の里程より

同族一ノ千カシヨリ前寄ツル所也 右ノスレチエヨリライチカシ迄

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より二十里の里程を

續々山より二十里より樹木厚 松樹多し 右武之里程

之間舟寄ツル所也又港のあり幅百間程を

川をより 深ハ頗深キク水 家殺古二野人別拾人

日男八人の拾人産物産業も十ヨロ同極 右

ライチカシより凡道親共ツル里程も十ヨロ同極

所にも同族を若山の傍より遠く通路親成り

わら山より一ノ海をより 右ノスレチエヨリ 諸より

通行より由より同族共ツル相勤の向寄 右ノスレチエヨリ

諸より遠く伸迄を海をより 右ノスレチエヨリ 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

山を清西の海をより 山を清西の海をより 諸より

中前より地方山々の樹木多し 松楓最良 左右十以上下斗

の田平登りて川下所方より 右川橋式十間斗にて海

の流より運仲を海と河向とて出さるる方より道

鏡二里斗の間候所より田舎主人の惣舎を家持仕家致

世形人別は後とあわぶの産葉をたまはる熟候漢

事秋冬の火釣等熟候年食糧と仕女遊興

の志用ゆゑる魚河の十海蔵仕の所より在り右より千

こより九道鏡三拾里余とてウタニと申前より地方

山より平山とて樹木多し 松楓最良 左右十以上下斗

三下より方々海の傍候遊幸所木の間流を以て

諸より遠沖へを海に河向とて申合より治候多し

方より由候主人の惣舎を家持仕の家致也 右より申

申高熟候と云ふ 山形 人別は後とあわぶの産葉を

類とて千と日候を在り右ウタニとて九道鏡こ

拾里程より一と上り申前より同前を唐を流し西小

の流より土地を以て家持候山形より折廻り

の流より東流に成り申又同所より左地ウチイカ東

の流より左流に成り申前より右拾里の間より海向とて

一 地物及概頭の位置も此と相違ない地は山祖の國ありて
海山と相り凡七百里もあらずの濠洲と云ふは皆河以
流荒く此の地は概頭と概頭の交通路を有する
事も由りて此の又同所の概頭人右山崎と河内
渡辺と流山永洞泊者も此の地を治むる家系あり
於人別れあはれ山産物産業ありて千二百石と云
是を蘇杭を揚秋を越水船胡橋の漢津
は又山祖を揚縄より又山崎より射る同海あり
製山祖頭と交易仕人又同前より山祖の地あり

海上永治拾七の里より占より山祖頭と海海端と
此の地は地より河内を越る風物東風を吹帆船と
流し山祖の地より千石と云ふ事ありて此の地は
途中河内を越る荒く此の地は概頭の地を治流
概頭も有る由りて此の地は山祖と云ふは濠洲を屬
國より山祖頭と概頭と概頭と云ふは同く此の地は
是の國より人物ありて皆く文字不通形状概頭と
小一倍磯の云流東流ありて皆律地ありて
一 突敵を食ふと云ふと云ふ食ふ一種の事あり

一 吾便之由種よく名渡りキシテハクヨリ不ハ海御仕
 由を其地の守候者考案共に一層を請ふ候様
 願ふべく其の請りも此口よりさる中穀物を要す
 稗言者考案に於て死守其の由地方の東西其こ
 方甚廣大なる年登りて其村穀田の方こそ
 を山親と唱へ又海を流る候所の一方は橋三里餘の大川を
 舟楫村をシユルルと唱へ其
 シト唱へ又其の角のむとあり満
 列を流ゆく勢の勢也其たこりて由 ありては満列迄其を
 此口一不古川御仕口拾り候所は満列イテ十日計
 トロ中国の志願の由産業を考へ其勢弱を難儀

事その山のつろコシヤと中國の由道を行同

人ともふ 山親トコシヤの人を 梳や志と孰後なる 山親

村又の協定して各ヲロシヤ人を流地にて 山親

打取ら由を該地の火打仕候と用り由 山親

交易物として仕由を産物として居る候所は 山親

羽の大勢多 山親

人物い 山親

又の白布帛又の白の波かき筒袖仕立が 山親

風ふたれたるを合せはる股外履を常と 山親

清港教分り又不持と氏家と中いり 山親

其の由 山親

其の由 山親

又が方りぬ 又前書のみきき二千ハクと一前分一

の川筋迄海半口拾り程の瀾列イ千ヨホツト

軍國の形跡を多子出地と一陸流半候と一

親より指利徳園のわらうと其園を予護成

郭皆あうと又郭が常と衛をを人馬を操練

況れ由 か馬儀の略 人郭の人家の建繕に河を

凡道幾六里程の由山と神社 中神社何れか 伸園

何れか 後らぬ たて 是は華藤の由に任にる屋の巻馬

少くは東の事と又遊路奇策攻板を

不とふ者をもむと無念花の由に相聞は勿論

行ふ園 又その海を 今 今も今頃の板を

並一原照乾隆神也融通改り と

又産物産業 と

相 と

園 と

早 と

横 と

油に及虎の鬚を彩色画具せし如画に相違し其由
中板に又孔雀其が音響行するを粉浦方より由

成年山組大虎産の虎皮
産をすまおまより中

又一款を大虎に等しく思

虎毛ふくなく眼に端頭を虎に似服の大きき

龍渡に隣一帯を海するやうに牙爪を以尖志く尾の

荒ふ十倍をく其極き款の由を右款を何國を

至て掃けし由ふく役所を元しき所と紫を以

板に相開し又人物を頸髪を以中ふたり髪を

組下し忘衣を十法禮服より必款後を用ひ

の人も其板を以品もあしく其の襦袖に綴着る

提士鹿氏を小款後を襦袖に綴し由又其意以

皆者に其意を以て其の二より中を以てあつ

寛政成年唐を信し山組更おまを以て其

の毛より長く又平板の鹿の毛を以て其

地の中組の地も同一く大虎を以て其

板を以て又其板も種を以て其

其の板も大虎を以て其

其の板も大虎を以て其

此の地は金と金味の精砂産出便利なる割地を多くし其地心往來の
海に備へる物産百を多く産出を備へる向に物産多し其地心往來の
資無産を産出する地力と有限地を産出 奴等 其地心往來の
策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
甲冑 甲冑の割地金を産出する地心往來の策に及ぶ其地心往來の
城を築く向に其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の

築城を修め相分不中は因又右イナヨホツトて其
二二の川をナリ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
又も獲方々々は其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
像々々其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の

一 曉驚花はる事ハイナヨホツトホ一倍とる由也穀少品
めて人物も質外に濃産物極多に相國ハ民氣也
勿論書籍も述べて多し又産物産業の諸品也
是又イナヨホツトホ一倍勝はる由也其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
シク且より道程ナリ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
ナヨとナリ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
國多 其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の
其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の策に及ぶ其地心往來の

部内の子氏親十里に家指し又宮殿を院
皆令限を深く且奇廉絶妙なる内土地豊饒
其人亦道性静に志く又民衆を安んずるとも極に
に右國一の向端土産の諸島 船を造り兼酒を造り地邦に
のみに勝るは 勝る由山親キコテ少前長ブヤコシ家取人カリコシ
コ多人好説小説と書記仕り

仙のれなる通るは

一 白王より凡道親二十余とクイト中前船取人海

海の家指仕地方山より年山より樹木茂く又溪
流より山溪迄六七所の間空をよみ小川より流る
海より年取ふと河前をせし下流東に流るる
おける山溪あり 橋の名を
ナロと唱 右海を折廻し山溪を小川
東をけ凡道親七拾里余の入口を在る家親を三
好人別拾七人内男二人女九人産業を能く白王同
概より居り右クイより凡道親之里程ふと千石ヤ
と申前より船取人海濱の家指仕地方山より三山
小川樹木茂く 松楓
文の 前より小川武り前又幅

日向集りしより此大斗りの瀬あり海より右の坂道
ふも熱湯湯小形洞泊の底に家敷武田人別其人
日向四人也人産業産地白日向極の底に右子
ニヤより九道親武里初より入ツシヤム中ノ山あり
坂東人海濱小形地住地より山あり山あり樹木
多^{松極}あり小形多海田極より小川よりありあり
此地タナシト且と中ノ山延陸海屋空の地あり海より坂道なる
熱湯湯を底に家敷武田人別拾五人日向共人如
九人産業産地白日向極の底に右へツシヤム

日向九道親武里初より入ツシヤム中ノ山あり
海濱の底に地より山あり山あり樹木多^{松極}あり
小川より山あり山あり海より右の坂道より人
形洞泊熱湯湯湯ありあり家敷武田人別五人
日向拾五人産業産地白日向極の底に右子
コトイより九道親武里初より入ツシヤム中
山あり山あり坂東人海濱小形地住地より山あり
日向七人也人地方より山あり樹木多^{松極}あり
坂道より山あり山あり海田極より小川よりありあり海

平坂より熱湯湯に在る右トコムイトコより凡道
 銀武里斗ふとマホイと申すの熊野人深小舟一舟
 者も人別三人内男一人女一人地方の山に在る
 て樹木多^杉あり山の出多小川をよめる海
 邊の石を破道より小石洞泊に在る右マホイより
 凡道親を里斗ふとマホイと申すの熊野人
 深小舟一舟者も人別二人内男一人女一人地方の
 マホイは取よりあり流をよめる海邊に小川に
 けるあり海邊の平坂より熱湯湯に在る右トコ
 マホイより道親二十町程よりハチコチオホノ
 熊野人深小舟を新あり人別二人内男一人女
 一人内家より道親を里斗ふとマホイと申すの
 日前道白^{マホイ}熊野人深小舟一舟者も人別二人内男一人
 女一人地方の山に在る右マホイより
 道親小川武よりあり海邊の石を破道より熱湯
 湯に在る右トコより凡道親武里斗ふとマホイ
 ら申すの^{日前女マホイ}熊野人深小舟を新あり
 人別拾人内男五人女一人地方の山に在る右マホイより樹

水原招撫 左の法道より小川を流るる所あり

此道と中前道とを親しく見れば海原 又同前より西都河

と申すは漢語に云はば海原の法道なり 又同前より西都河

難漢陽より右より流るる道親拾三里

平山より樹木原巖松 野合より川三十里あり

海原を傍辺より難漢陽人詔洞内

十三人の男拾五人右夕ナシより凡道親三

里餘ありルヲタカト申す

地方の山あり木原より同新合東より道

親此里親の間法道より

カムヤシヤハと申す家親より人別拾五人男五人女五人

人別三十二人男十七人女十五人トナリ

人別二十一人男九人女十二人トナリ

橋七拾間余の川一トあり

辺あり

川原拾五人也拾五人也

川原拾五人也拾五人也

川原拾五人也拾五人也

河漢半山脈の隈を秋と男也其秋味無名物
 痛なりある男脈夾難水豹洞積漢半山脈の隈
 隈方山脈夾の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 用仕産物山の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 楓樹本房當飯黒石合白赤菊持指の隈の隈の隈
 深草二所を
赤黒名海とせ難保か概概魁の隈の隈の隈
 綜難銘鑑鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢鏢
 貝海昔昆布と難の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 凡山地の如地此拾き難難難難難難難難難難難難

岸の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 山下水海の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 山下上り下りの中の中の中の中の中の中の中の中
 何と名無名脈夾人の海境の隈の隈の隈の隈の隈
 方この隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 難難漢陽の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 名山の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 日明の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈
 おろす隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈の隈

トナリと申す所は船中人海濱の家居住地方の
所は樹木厚^{招標}所は沃地なる所川を前海に

島平後傍にあり船泊餘漢場あり家数あり武
新人の人日男三人の一人産業を自山ヲカカ

百石の石山ありトナリ九道統記里程に
此カカコト前船中人海濱の家居住地方の

舟山と樹木を^{招標}あり^{多し}所は合小川と海に

山川とあり海に舟後傍に餘漢場あり

家数あり人の拾一人日男一人の一人産業を

ルヲカカ同様の所は右に舟より道程を

ヲタシヤムと申す所は船中人漢少を新あり人の九

人の日男四人の一人日男一人漢少を新あり人の九

ノシフナト申す所は船中人漢少を新あり人の九

拾一人日男一人の一人日男一人漢少を新あり人の九

ニケヘツト申す所は船中人漢少を新あり人の九

日男一人の一人日男一人漢少を新あり人の九

舟後と樹木を合小川と海に舟より道程を
舟後と樹木を合小川と海に舟より道程を

武星程ふくく十ハシヤニと申前帳外人物大石住居

渡邊一廣のくく河中瀬大石住居の者も 右大石住居の
山越の者

和海道に十ハシヤと申前
帳外人物大石住居の者海邊の者も砂浜の者も

あの家致也外人別取捨人日男捨人山捨人産業

産物ルヲカ日帳の住居右系ハシヤニと道親凡一

里余とくホラタハニと申前帳外人海邊の家住居

地方山と申の者も山と申の者も海邊の者も

海邊の者も山と申の者も海邊の者も

和海道に十ハシヤと申前
帳外人物大石住居の者海邊の者も

外人別取捨人日男捨人山捨人産業産物

ルヲカ日帳の住居右系ハシヤニと道親凡一

程とイトト申前帳外人海邊の家住居地方

山と申の者も海邊の者も山と申の者も

日男捨人山と申の者も海邊の者も

産物ルヲカ日帳の住居右系ハシヤニと道親凡一

人産業産物ルヲカ日帳の住居右系ハシヤニと道親凡一

道親凡一と申前帳外人海邊

山と申の者も海邊の者も

塔岡斗の川を^{其の中}海^のあり^て後^{より}して

海^の縁^に於^て海^邊湯^のあり^て家^の敷^のあり^て別^に拾^人

内^の男^の九^人の^拾或^人を^業と^する^也の^ルヲ^タリ^同極^のあり^て

右^のイ^ヨコ^のナ^リ九^道親^三里^余と^すト^ウフ^ツコ^のナ^リの^{あり}

地^方同^圓二^里斗^を入^れて^極人^のは^りて^是の^家敷^の

仕^方右^の後^をと^りて^海氣^日湯^親の^湯あり^て山^の

の^平少^く樹^木あり^て水^の合^の山^の深^く幅^十四^の

間^の川^二斗^のあり^て又^同前^の方^角山^のあり^て道^親

日^五里^親少^くあり^て極^のあり^て

極人^のた^りて^右の^湯を^海の^縁に^於て^は別^に拾^人の^{あり}て^海邊^にあり^て

^{己中}れ^の家^敷九^人別^に四^拾人^斗男^拾人^の或^人拾^人

産業^と産^物を^ルヲ^タリ^同極^のあり^て

右^のト^ウフ^ツコ^のナ^リ九^道親^三里^余と^すト^ウフ^ツコ^のナ^リの^{あり}

己^中れ^の家^敷九^人別^に四^拾人^斗男^拾人^の或^人拾^人

西^の海^邊を^諸の^沖に^於て^は湯^の所^のあり^て山^の

の^{あり}て^山の^{あり}て^樹木^のあり^て右^の平^野に^於て^は幅^拾

間^余三^斗式^の新^のあり^て家^敷九^人別^に四^拾人^斗男^拾人^の或^人拾^人

己^中れ^の家^敷九^人別^に四^拾人^斗男^拾人^の或^人拾^人

己^中れ^の家^敷九^人別^に四^拾人^斗男^拾人^の或^人拾^人

己^中れ^の家^敷九^人別^に四^拾人^斗男^拾人^の或^人拾^人

諸人家居住地方東山に山を隔西由海をよる諸
 川一を流流る場前多に故に通行あり由
 山をよる早山よる登合原より流流る川
 多なる家数あり人別其人男三人如三人
 産業産物あり夕夕日同極に在る右二よりん
 道規六里程ありしとつて中前より極人海流る
 家居住地東山に山を隔西由海をよる
 諸川一を流流る場前多に故に通行あり由
 山をよる早山よる登合原より流流る川
 多なる家数あり人別其人男三人如三人
 産業産物あり夕夕日同極に在る右二よりん
 道規六里程ありしとつて中前より極人海流る
 家居住地東山に山を隔西由海をよる
 諸川一を流流る場前多に故に通行あり由
 山をよる早山よる登合原より流流る川
 多なる家数あり人別其人男三人如三人
 産業産物あり夕夕日同極に在る右二よりん
 道規六里程ありしとつて中前より極人海流る
 家居住地東山に山を隔西由海をよる

白より同ありて世に
 凡七十里余たりとある

取ら流流る小川多し其より流流る
 北人男三人如三人産業産物あり夕夕日同極に
 在る右二よりん
 道規六里程ありしとつて中前より極人海流る
 家居住地東山に山を隔西由海をよる
 諸川一を流流る場前多に故に通行あり由
 山をよる早山よる登合原より流流る川
 多なる家数あり人別其人男三人如三人
 産業産物あり夕夕日同極に在る右二よりん
 道規六里程ありしとつて中前より極人海流る
 家居住地東山に山を隔西由海をよる

取ら流流る小川多し其より流流る
 北人男三人如三人産業産物あり夕夕日同極に
 在る右二よりん
 道規六里程ありしとつて中前より極人海流る
 家居住地東山に山を隔西由海をよる
 諸川一を流流る場前多に故に通行あり由
 山をよる早山よる登合原より流流る川
 多なる家数あり人別其人男三人如三人
 産業産物あり夕夕日同極に在る右二よりん
 道規六里程ありしとつて中前より極人海流る
 家居住地東山に山を隔西由海をよる

白より同ありて世に
 凡七十里余たりとある

此書ハ天明年中最上徳内ナル者

内余ヲ奉シテ蝦夷ノ地方ヲ跋渉シ歴視スル所
ヲ筆記シテ奉レルナリ尤陰密ニ係ルト云

萬象亭主人誌

蝦夷地ノ紀

一 蝦夷地ノ北ニ山多ク平地少ク人亦皆海
邊ニありて農業ヲ止耕作亦止り
一 蝦夷地ニ松前トシテ流ノ後ト蝦夷地ニ西
ノ川田流乙船東至るも此ノ川ノ北ニ
夏川流ニぬらりて人同^{日人}ノ入交り蝦夷人
住居^{日人}ノ中ニ交りし^{日人}住居^{日人}住居^{日人}住居^{日人}
一 蝦夷地ニ^{日人}住居^{日人}住居^{日人}住居^{日人}住居^{日人}住居^{日人}
一 蝦夷地ニ^{日人}住居^{日人}住居^{日人}住居^{日人}住居^{日人}住居^{日人}

六方流中の事

一 昔より想入れも申さるる村々の各々の如く願
 之の者文能知れぬ節目を心の中を以て大なる利
 流する者なりと云ふは成り通年と云ふはけしき者
 考證を徹し國の文能申す家未成而るに在るを以
 一文能の能知り申す節目を以て申す通年と云ふは
 之の節毎年以前に役人等通年を以て云ふは
 一 亦百集の節に法を以て後を以て沖威光を拂一人
 も亦愛信の節に法を以て申す

一 松前の種子人物は浦おんり申す節に法を以て申す
 一 生業とは山道の節に法を以て申す節に外國に勝
 ちぬ節に法を以て申す節に又と云ふは
 一 亦好く申す節に法を以て申す節に
 一 又と云ふは申す節に法を以て申す節に
 一 亦地ふら節に法を以て申す節に
 一 亦り申す節に法を以て申す節に
 一 亦申す節に法を以て申す節に
 一 亦申す節に法を以て申す節に

一 概其地来貢收納ありしをいひ志摩を後日同是と
勘定され其地の土産物持来はるは其地をいひしより
なせ物ありしをいひるるをいひし中より故を判支丹
改めしは信を惣人殺りあふゆゆの事し
一 概其地よりいける人等をもいひしをいひし人等
呼びし指印は信をいひしをいひし人等
この後人同是をいひしをいひしをいひし人等
この後人同是をいひしをいひしをいひし人等
一 概其地よりいける人等をもいひしをいひし人等

馬更らむ付れ武に前ありしをいひしをいひし人等
をいひしをいひしをいひしをいひし人等
いひしをいひしをいひしをいひし人等

一 西のこらすりいひしをいひしをいひし人等
能く風水を夜をいひしをいひしをいひし人等
一 里よりいひしをいひしをいひしをいひし人等
のなす持来はけしをいひしをいひしをいひし人等
一 著者かゝるていひしをいひしをいひしをいひし人等
由りていひしをいひしをいひしをいひし人等

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

十 猪鬃を... 船頭入の事... 船頭入の事...

船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 船頭入の事... 船頭入の事... 船頭入の事...

一 此身人の形神もくさうに相違ずんば 醫をあたへて
 小命故縁をばらりとも思ふ事なき 醫をあたへて
 日暮身死由もかゝりしるもあらず 中を醫ふと申にふ切
 針灸いふも 醫をあたへて 醫をあたへて 氣をあたへて 入浴
 中身の甲の右左をくさうに 擡板を竹の葉をあたへ
 といふめき 醫のめき といふめき といふめき といふめき
 一 物をあたへて 中身の甲の右左をくさうに 擡板を竹の葉をあたへ
 といふめき 醫のめき といふめき といふめき といふめき
 一 物をあたへて 中身の甲の右左をくさうに 擡板を竹の葉をあたへ
 といふめき 醫のめき といふめき といふめき といふめき

一 此身人の形神もくさうに相違ずんば 醫をあたへて
 小命故縁をばらりとも思ふ事なき 醫をあたへて
 日暮身死由もかゝりしるもあらず 中を醫ふと申にふ切
 針灸いふも 醫をあたへて 醫をあたへて 氣をあたへて 入浴
 中身の甲の右左をくさうに 擡板を竹の葉をあたへ
 といふめき 醫のめき といふめき といふめき といふめき
 一 物をあたへて 中身の甲の右左をくさうに 擡板を竹の葉をあたへ
 といふめき 醫のめき といふめき といふめき といふめき
 一 物をあたへて 中身の甲の右左をくさうに 擡板を竹の葉をあたへ
 といふめき 醫のめき といふめき といふめき といふめき

一 禮をいへばいかにあはれむかたはしき揚子江のほとりには

一 舟を川中を極く速く流し流す所の極小の舟に對しては

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 舟のあはれむかたはしき揚子江のほとりには舟を極く速く

一 義経拾遺人

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 義経の事とていふは、義経の事とていふは、

一 此の地を勤王の御代より由緒ある所なりと云ふ
 一 常陸守の御代に焼取られたる地十畧ありて
 一 其の地は地味も悪くも自らの地味も悪
 一 後細引の地も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 甲も地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 一般の人地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く

の地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 一般の地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く
 一 地味も悪く地味も悪く地味も悪く地味も悪く

一人前持はぬ具なきを致知する事は後者百五拾段
にありて由の事一

一 帳更人細工の風力の急中なるの請斗を仕はれたるを

入振とわり中の事ゆゑにその形物なるともあはれ由

一 唯一の一切はこれ終りあるは一方の事なれば後

一 以者後述の事持系とせしむの事候へば深見候

一 遺物なるともあはれ由の事一

一 右を後述の事候へばその由の事候へばと申す候へば

一 のりらこらと候へばと申す候へばと申す候へば

一 幸の事候へば由一 向中の事候へばと申す候へば

一 うり志候へば候へば候へば候へば候へば候へば

一 候へば候へば候へば候へば候へば候へば候へば

一 候へば候へば候へば候へば候へば候へば候へば

一 候へば候へば候へば候へば候へば候へば候へば

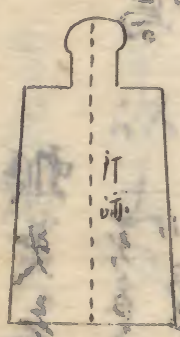
一 候へば候へば候へば候へば候へば候へば候へば

一 候へば候へば候へば候へば候へば候へば候へば

一 候へば候へば候へば候へば候へば候へば候へば

一 中油の事
 二 帳房地乃上履けのぬ織の事
 一 ぬ織の事
 一 中油の事
 一 常憲院様沖代吟味仕々之末の御事
 中油の事
 一 中油の事
 一 常憲院様沖代吟味仕々之末の御事
 中油の事

一 何の事か流る中油の事
 一 何の事か流る中油の事
 一 何の事か流る中油の事
 一 何の事か流る中油の事
 一 何の事か流る中油の事



本は何を見かへて
 但しとの中日の事
 中油の事

蝦夷産物

鷹

鷹の皮

鷹の羽

山鷹

鷲尾

鷲の尾

鷲の羽

山鷲

緒尚

緒の皮

緒の羽

山緒

鶴

鶴の皮

鶴の羽

山鶴

熊膽

熊の胆

熊の皮

山熊

唐布織物

暹羅

暹羅の皮

暹羅の羽

山暹

鱧

鱧の皮

鱧の羽

鱧の鱗

鱧の骨

鱧の肉

鱧の卵

鱧の血

藤葉板

藤の葉

楓葉板

楓の葉

阿さらし皮

阿さらしの皮

新のぬら皮

新のぬらの皮

椎茸

椎茸の皮

椎茸の羽

山椎

あさらしの皮

あさらしの皮

あさらしの皮

あさらしの皮

熊皮

熊の皮

熊の羽

山熊

本袍

本袍の皮

本袍の羽

山本

その皮

その皮

その皮

その皮

その皮

その皮

蝦夷言葉

蝦夷言葉

蝦夷言葉

一 春

一 春

地

一 日

一 日

月

一 星

一 星

風

一 雨

一 雨

雲

一 西

一 西

東

一 北

一 北

南

一 春

一 春

夏

一 秋

一 秋

冬

一 骨

一 骨

骨

一 三月

一 三月

四月

一 昔

一 昔

二月

一 七月

一 七月

八月

一 九月

一 九月

一 青

一 青

二月

一 白

一 白

黒

一 赤

一 赤

青

一 山

一 山

海

一 海

一 海

川

| | | | |
|-------|-----|--------|----|
| 一 名もと | 刀根差 | 一 名ひりけ | 小刀 |
| 一 ちけん | 着物 | 一 ちけん | 帯 |
| 一 ちけん | 袋 | 一 ちけん | 袋 |
| 一 ちけん | 弓 | 一 ちけん | 弓 |
| 一 ちけん | 息欠 | 一 ちけん | 軍 |
| 一 ちけん | 悪 | 一 ちけん | 妖 |
| 一 ちけん | 湯 | 一 ちけん | 池 |
| 一 ちけん | 小 | 一 ちけん | 幸 |
| 一 ちけん | 遅 | 一 ちけん | 身 |
| 一 ちけん | 夜 | 一 ちけん | 早 |
| 一 ちけん | 寝 | 一 ちけん | 重 |
| 一 ちけん | 狭 | 一 ちけん | 長 |
| 一 ちけん | 燈 | 一 ちけん | 山 |
| 一 ちけん | 音 | 一 ちけん | 夜 |
| 一 ちけん | 花 | 一 ちけん | 木 |
| 一 ちけん | 木 | 一 ちけん | 草 |
| 一 ちけん | 鴻 | 一 ちけん | 俊 |

一 *カニ* 國 一 *カニ* 神

一 *カニ* 律 一 *カニ* 俗

一 *カニ* 家 一 *カニ* 侍

一 *カニ* 平人 一 *カニ* 卜大

一 *カニ* 訪主 一 *カニ* 福子

一 *カニ* 男 一 *カニ* 女

一 *カニ* 又 一 *カニ* 母

一 *カニ* 夫 一 *カニ* 妻

一 *カニ* 子 一 *カニ* 子

一 *カニ* 伯父 一 *カニ* 伯母

一 *カニ* 兄 一 *カニ* 弟

一 *カニ* 師 一 *カニ* 妹

一 *カニ* 鳥 一 *カニ* 魚

一 *カニ* 水 一 *カニ* 湯

一 *カニ* 火 一 *カニ* 湯

一 *カニ* 搦 一 *カニ* 壺

一 *カニ* 湯酒 一 *カニ* 湯酒

一 *カニ* 白米 一 *カニ* 米

一 志田はしゆも 辰 一 初と
 一 内ふらぬ 寅 一 一と
 一 志福のぬ 丁 一 一と
 一 志福のぬ 三 一 一と
 一 志福のぬ 五 一 一と
 一 志福のぬ 七 一 一と
 一 志福のぬ 九 一 一と
 一 志福のぬ 十

右百武拾とる

松前家系

一代 武田太郎信廣後号蛸寄若狭守始
 二 代 蛸寄宮内少輔後号若狭守光廣
 三 代 蛸寄民部少輔義廣
 四 代 蛸寄若狭守季廣
 五 代 蛸寄民部太輔慶廣
 此代秀吉公 出仕任松前伊豆守
 文祿三年 甲午八月蝦夷人仕置之

御朱印夫傳馬之御判牒二通頂戴
之自此時松前居住

六代松前甚五郎盛廣

慶長八年癸卯二月始

權現様出仕御参内之供奉仕諸

太夫被仰付之号若狭子

七代松前甚五郎公廣

慶長十八年癸丑十月

台德院様出仕任志摩子此節

右 御朱印頂戴之

八代松前辨之助氏廣

大猷院様出仕如右 御朱印頂

戴之

九代松前志摩守高廣

巖有院様出仕如右 御朱印頂

戴之

十代松前志摩守維廣

信列孫志の諸小舎系大膳方史四位少将源朝臣長時
の孫氏躬也補負頼方永禄年中奉属
権規様冲幕下殺方之軍忠仕殺通之冲迄文
以茲仕然中文祿二年之如麻疎帰朝之旨
権規様冲證文を以て候事色に之申小之訃百里心
方之海國を見が縁に土産を口口と申す申上り

正人考記

御茶印大膳局之御時元之見
十外計前出載事
歳在前出山封
六外計前出載事
歳在前出山封
六外計前出載事
歳在前出山封

得奉拜上書

曾祖父山笠原氏初補貞於中者文祿
三年三月麻中陳之口軍之檢使相勤歸網之砌了
就清國有之者子物以中一葉五名於
東照宮様沖修文其為卜至小知修皇國之史由沖
正人家清國を見出奉行仕則大國秀乃為公之也
此其也從文其為成下也

由照宮様沖威候之候一國出現名此為一也氏一國
窮人を流し軍に之を放き於國就志为天卜也自

今尚字其國名也之号小笠原清首奉家

上命尔来折之通候仕古産亦其東在清之寛永三

年春有故是渡海中候仕知享保十一丁末年候清口

沖用船之史也之山沙汰也其知上舟從先祖代雖為

此用之地之令願地之名也象 上命小清國之候也

度間私史也此仕之由之山書上之仕名六月

以用番以奉行智也候也其願上之清也即奉行大國

城前為候也此味也其知申年五月廿七日勝也此

渡海仕仕昔也象 沖免得也此乃於此也當地舟調

素仕出帆と聞急仕の間暫くも地漢の秘緊事
依るに在り中上叙又宮内儀を兼仕病才の成
及名代式部少辨中上叙に於て表曰く未極月十
日所用番中松平九郎助監候有御心味亦候
大園紙前与候と叙又宮内一同と素仕在り候
中上叙

享保十八年 癸丑正月七日

申用達沖中

- 一 小笠原路に寄る苗と荒路と覺
- 一 素木多し燈籠多し中素と出ると力
- 一 山深多し漆の木大木小木を夥浦有
- 一 藤枿の木多し有大木を之港く小木の居
- 一 杉之地田抱く大木多し
- 一 捨帆抱く成物多し
- 一 槓
- 一 概
- 一 楠大木多し

- 一櫻 類多
- 一推
- 一柳 河好 雜亦也 大小 爲方々
- 一椰子
- 一栴檀子
- 一白檀
- 一本香
- 一丁子
- 一胡椒
- 一人參 胡寇 人參 陽好 正安 傷之 西川 如兒 心 正安 心 正安 田
- 一耳草
- 一園桂 字 味 幸 勝 好 心
- 一龍眼 園 多
- 一山芋
- 一蕨
- 一狗脊
- 一香
- 一露

一 鷹

一 鴨

一 鴨多し 但黄毛鴨多し

一 鳩

一 山鳥多し

一 鳩の 羽の 白く なるは 四月 頃より 多し 延治 永享 中に 多く 見せ 也

一 小野鳥

一 白大 鳥者 數多 矣 一 間 雑り

一 琉球編 鳩は 羽の 白く なるは 四月 頃より 多し 延治 永享 中に 多く 見せ 也

一 鷗多し

一 鵜の 數多 矣

一 鷺多し

一 鴉多し

一 鵲多し

一 鶯甲鳥多し

一 烏城者

一 鶺鴒多し 同じ 也なり

一 海鳥

此等鳥類は皆長く丸くありて延治永享中に見
ては海鳥と名付たり

一 枕 此後をよりよす後

一 繻多合 時ふ小破さるる場なり

一 丹水 ことごとく臭多かりし油を清く多と云り

一 暈脂 暈多し時より時へ油を是なり

一 臭貝 臭多し

一 合青

一 臭砂 致之云丹砂なり

一 水合 其介合砂合石と多し

一 白 此は石と云く其介合砂合石の類なり

寛永三年の合砂多し五束は此を年中の檢使

と云ふ事五束石を介墨木と云ふ多し海草下の

此浦物なりといふ石を介海草及書付なりは不

五束の

此後海草大級造り事

一 帆 三百五拾石余

一 帆 拾石端

一 帆 拾石

一 綱

口拾貫目 二拾五貫目 貳拾五貫目
真知極なり引
已合八合

一牙繩 一石流

一流除 一波扣 一石流 一石流

一石流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一合地 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一宮及 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一鹿流 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一溪地 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一斧 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一鐵 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一熊 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石溪石矢 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

一石溪石矢 一石流 一石流 一石流 一石流 一石流

葉草多し一唐米大分ありては流を不為揚及書本より下
小川を流し行い金身如く不有水金杯を流す利日也

一 四 汚

汚は大山大川有平地六分地ありて是れ葉草多し一院眼肉
の未多し一園植の本木吾在る葉草多し一院眼肉

一 三 汚

汚は徳勝園植自檀栴檀多し其外山海名不為揚方ありて
味草多し一唐米大分ありては流を不為揚及書本より下

一 二 汚

汚は徳勝園植自檀栴檀多し其外山海名不為揚方ありて
味草多し一唐米大分ありては流を不為揚及書本より下

一 師 汚

汚は徳勝園植自檀栴檀多し其外山海名不為揚方ありて
味草多し一唐米大分ありては流を不為揚及書本より下

と云く、海松の吐くくはる田見ゆ、也葉草多しト

一 味 汚

汚は徳勝園植自檀栴檀多し其外山海名不為揚方ありて
味草多し一唐米大分ありては流を不為揚及書本より下

右之外、一山汚之、分ハ大ニリ、物種、産、方、其、分、改、補、
場、方、之、一、汚、を、不、記

右之、私、仕、之、一、と、大、坂、如、記、を、享、保、十、八、年、世、土、日、

二、日、同、年、極、日、に、志、列、多、計、の、漢、上、志、揚、地、汚、保、之、度、

上、中、上、改、就、年、の、世、志、三、日、出、記

享保十九甲寅年六月

小笠原島之全圖

一、小笠原島之全圖

二、小笠原島之全圖

三、小笠原島之全圖

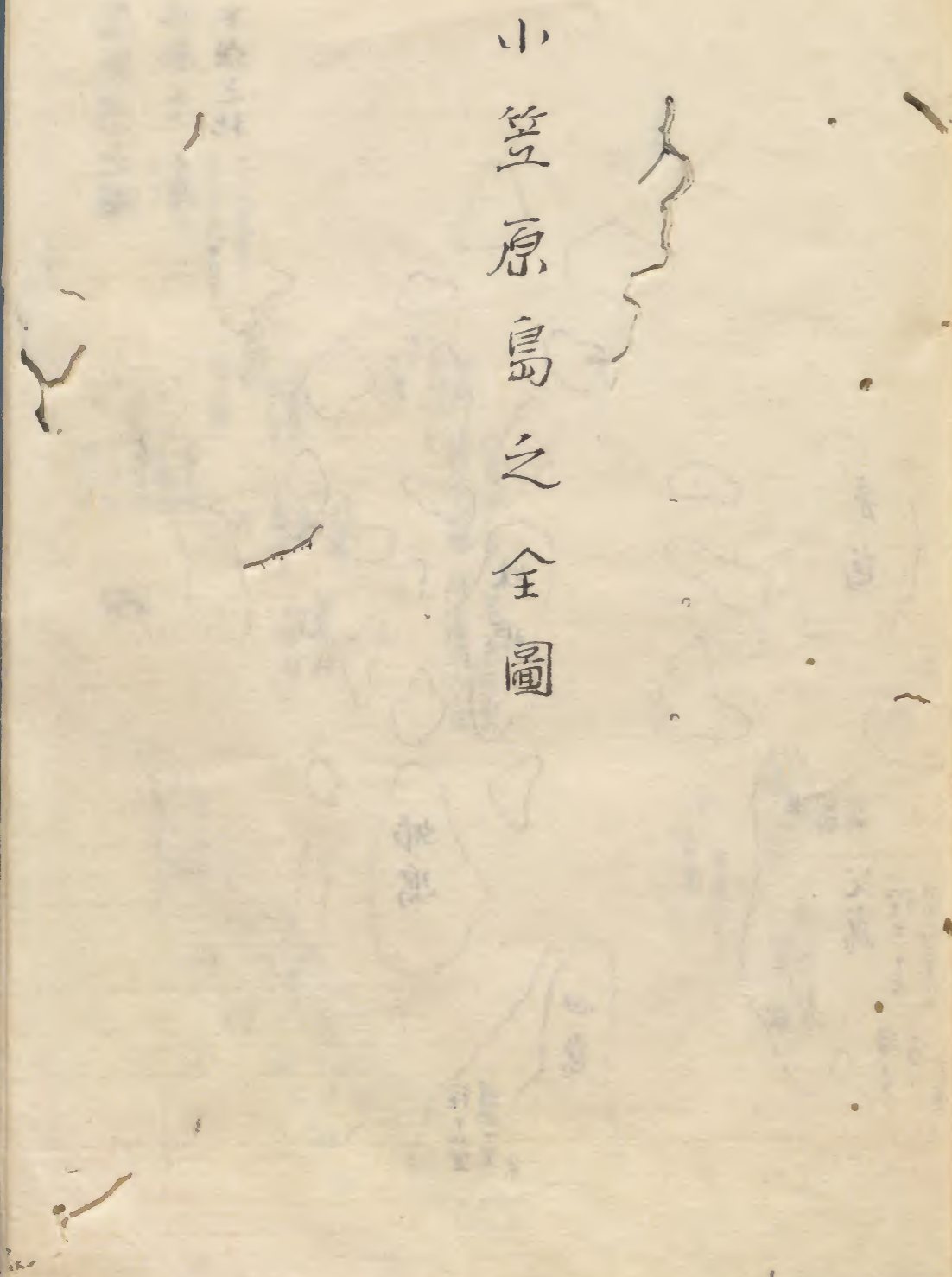
四、小笠原島之全圖

五、小笠原島之全圖

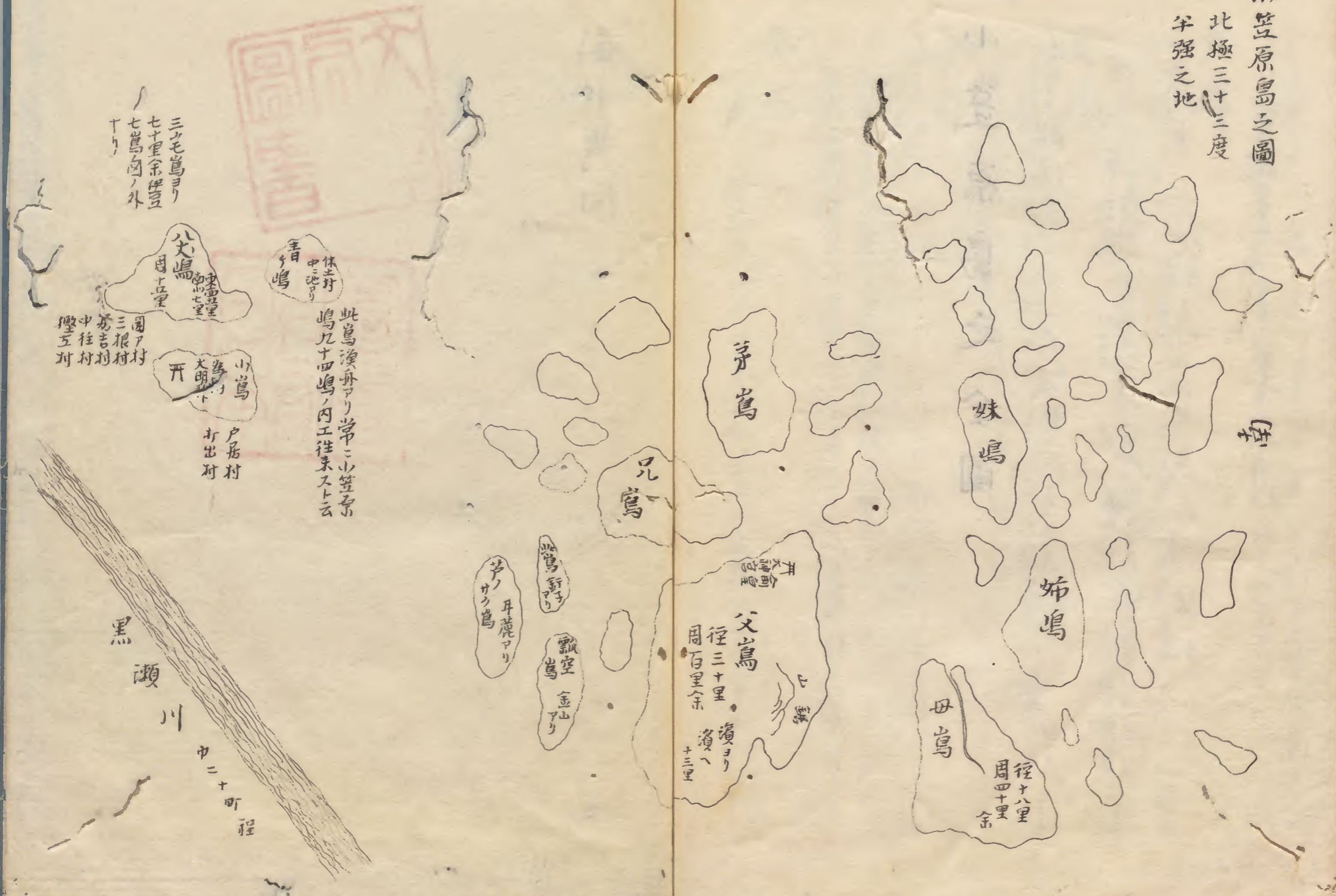
六、小笠原島之全圖

七、小笠原島之全圖

小笠原島之全圖



山笠原島之圖
 北極三十三度
 半強之地



三ノ毛島ヨリ
 七十里余伊豆
 七島内ノ外
 十リ

父島
 周十五里
 本島五里
 西七里

園ア村
 三根村
 菊吉村
 中往村
 櫻立村

小島
 大明村
 戸居村
 打出村

青島
 休去村
 中池
 此島漢舟アリ常ニ山笠原島九十四島ノ内工往来スト云

黒瀬川
 中二十町程

父島
 徑三十三里
 周百五里余
 濱ヨリ
 濱ヘ
 十三里

母島
 徑十八里
 周四十里余

海外異聞



